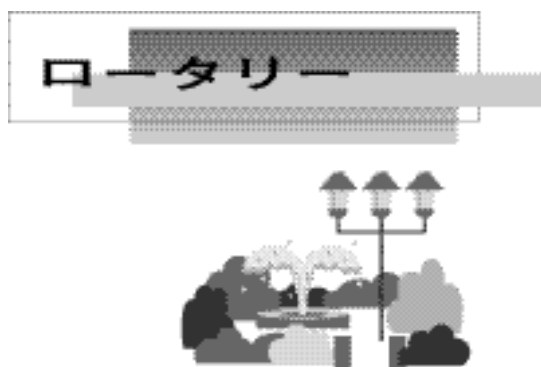




談 話 室

帰去来兮

「帰去来兮^{かえりなんいざ}、田園^{あで}將^{なん}に蕪^{なん}れんとす 胡^{なん}ぞ歸^{なん}らざる。既に自ら心を以て形の役と為す、奚^いぞ惆悵^{しもべ}として独り悲しむや。已往の諫むまじきを悟り、来者の追う可きを知る。実に途に迷うこと其れ未だに遠からず、今の是にして昨の非なるを覺りぬ。(中略) 帰去来兮^{かえりなんいざ}、請^うう 交^やわりを息めて以て遊^{ゆう}を絶たん。世と我とは相違^{あいたが}えるに、復た言に駕^がして焉^なをか求めんや。(中略) 已ぬるかな、形を宇内に寓^うする 復た幾時ぞ。曷^{いづ}ぞ心に委ねて去留を任せざる、胡^{なん}ぞ違^{ちゅう}違^{ちゅう}として何^{なん}くに之^{これ}かんと欲する。富貴は吾が願いに非ず、帝郷^{ていきやう}は期す可からず。良辰^{りやうしん}を懷^{おも}うて以て弧^{ひと}り行き、或いは杖^{てい}を植^うてて耘^{うん}仔^しす。(後略)。」

いま、研究者、技術者、教育者にとっての美しき「田園」は將^{まさ}に荒廃^まの危機に瀕^{ひん}している。大学や研究機関では競争的資金の獲得を強要され、企業では利益の見えた研究が重宝され、息の長い研究は敬遠されている。また、研究・教育の場にもトップダウンの体制が整備されている。一方、研究者、技術者の多くが当然の如く「ナノ」、「バイオ」などの極めて限られた分野の研究を志向するに至っている。いわゆる「先端」という名の下に多くの資金が集中的に投下されているからであろう。「先端研究」も「末端研究」になりかねないと危惧するところである。歴史を振り返ると、このように研究目標、資金、人材に限られた分野に集中するのは、戦時かファシズムの時代である。

「既に自ら心を以て形の役と為す、奚^いぞ惆悵^{しもべ}として独り悲しむや。来者の追う可きを知る。」

科学の世界においては、解明されたことは一部に過ぎず、未解明の事象にあふれているので、研究や技術開発の領域は無限に近いほど残されている。そのことは、地震予知や天気予報ですらあてにならないことを想起すれば明白である。したがって、研究者、技術者にとっての課題は枚挙の暇がない。この洋々たる世界に思考を飛翔させ、また、飛翔させる人材を育成することこそが、調和のとれた科学技術と文化の発展に資するのではあるまいか。

「実に途に迷うこと其れ未だに遠からず、今の是にして昨の非なるを覺りぬ。」

研究、教育の荒廃を助長していると考えられる他の要因は、情報社会の急速すぎる進展であろう。朝、研究室に現れた教員

や学生がまずパソコンを起動し、Eメールを確かめ、それに対応する。また、迷惑メールを削除する。かつて研究者がもっとも忌み嫌った「雑用」を朝一番に、長ければ1時間以上かけて、処理するのである。彼らには、昨日から考え続けた胸躍る実験結果や実験計画で、何はさておいても考え、実行しなければならないことはないのかと疑いたくなる。Eメールやインターネットによる情報は、手っ取り早く世の動きを把握し、それに追従する、あるいは世間を均質化するには有効ではあろうが、独創性の醸成には、超然として自ら考える時間と感性が重要である。かつて、論文ばかり読んでその影響を強く受け、二番煎じの研究を行う者を「文献学者」といい、社会のニーズに振り回される研究者は「曲学阿世の徒^{あせい}」といわれた。研究者、技術者、教育者は、情報に振り回されず、その発想において「心の欲する所に従って矩を踰えず^{のりこ}」でありたいし、そうしてこそ独創的研究を展開できる(ただし、研究の遂行時には文献調査などの情報収集が重要であることは言うまでもない)。とりわけ、実験科学者にとって、パソコンの前での時間の浪費と実験の放棄は自殺行為とも思える。メールのやり取りやインターネットによる情報収集から新しい発想が生まれる可能性は低い。実験によって得られる結果が、人智を超えた着想を与えることは、過去のノーベル賞受賞者による発見の多くが間違った実験の結果を出発点としていることから明らかである。

「帰去来兮^{かえりなんいざ}、請^うう 交^やわりを息めて以て遊^{ゆう}を絶たん。世と我とは相違^{あいたが}えるに、復た言に駕^がして焉^なをか求めんや。」

最後に、分析化学に話を限って、その研究について思うところを述べたい。近年、分析化学の分野は著しく拡大・細分化し、研究者や技術者が互いに他の研究を理解あるいは評価しがたくなってきている。そのためか、学会においても、分析化学研究者のわりに他分野をよく知っているように見えるが、当該分野に行くと未熟な知見でしかないとと思われる発表が数多い。また、定量法として提案されたものでも、実際の分析を念頭に置いた検討が極めて不十分なものと、定量法には程遠く、提案者自身もその方法で分析することを躊躇するのではないかと思えるものも多数ある(このような研究は、とくに流行を追従する分野に多い)。定量法として提案するのなら、せめて提案者本人は自信をもって使うものであって欲しい。定量法とはならないが、基礎的に重要な反応であれば、その視点での十分な検討が要求される。要は、分析化学者らしい、分析化学者でなければできない研究や技術開発を望むとともに、それを担う分析化学者が育成されることを期待したい。

「富貴は吾が願いに非ず、帝郷^{ていきやう}は期す可からず。」

「帰去来兮^{かえりなんいざ}、田園^あ將^{なん}に蕪^{なん}れんとす 胡^{なん}ぞ歸^{なん}らざる。」

〔京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 木原壮林〕

インホメーション

第2回分析化学基礎セミナー(有機分析編)

冬晴れの乾燥した日が続いた2005年12月13日(火)に、標記セミナーが(株)パーキンエルマージャパン横浜本社テクニ

カルセンターで開催された。今回の受講者は18名と少なく、無機分析編が定員オーバーとなるのと比べ残念であった。これは、有機分析の基礎がどちらかというと機器分析の応用面としてとらえられており、かつ内容も広い分野にわたると誤解されているせいかもしれない。受講者が比較的经验を積んだ人が多く、新人と思える人が少ないのが、無機セミナー参加者との違いのように感じられた。このことから、共通項である基礎を充実させて、今後回数を重ねることで本セミナーの認知度が上がれば、無機分析編を受講した人が引き続き有機分析編も受講し、参加者が増えるものと期待している。

当日は、恩田宣彦実行委員会幹事（パーキンエルマー・ジャパン）の司会進行で以下の講義が行われた。

1. 分析の質と管理—分析値の信頼性（実行委員長・武蔵工業大学工学部）平井昭司
2. 食品分析における試料の取り扱い（食品総合研究所）安井明美
3. 有機試料のマイクロ秤量と留意（千葉大学分析センター）関宏子
4. 分析法を考慮した固体試料の取り扱い（化学物質評価研究機構）渡邊知子
5. 液体試料の前処理—抽出・濃縮・誘導体化（横河アナリティカルシステムズ）大河原正光
6. 気体試料の取り扱いと実際（パーキンエルマー・ジャパン）世古民雄
7. データ処理の基礎—定性と定量（日立ハイテクノロジーズ）石川昌子
8. 質疑・応答

最後の質疑・応答の時間では、受講者から各講師への質問以外に、講師の先生も加わり本音を交えた活発なディスカッションが続き、予定した時間が足りないほどであった。内容も本質的な問題に対する基本的な考え方が聞けて、受講者だけでなく講師にとっても非常に勉強になった。

講師の先生への主な質問事項を以下に示す。

1. FT-IRでの樹脂の分析の際、樹脂の劣化の度合いによる影響について（渡邊講師）
2. 有効数字、数値の丸め方について；「5」の扱い方について；相関係数 r の使用について； R^2 を使わないのはなぜか？；ベースラインの引き方について；ピークが重なったときの処理の仕方について（石川講師）
3. 不確かさについて；単純に分析結果を出すだけでは不十分なのか？（平井講師）
4. 吸湿性のサンプルのはかり方について（関講師）
5. なぜ、LCの誘導体化試薬というのはたくさんあるのか？（大河原講師）

これらの質問以外でも今回の受講者からは、休憩時間や昼休みを利用し、それぞれ講師の先生に積極的に質問をしている姿が数多く見受けられたのが印象的であった。講師の先生には大変だったかもしれないが、Q & Aのセッションでの質疑応答や本音が聞けたことは、受講者にとって今後仕事をする上で参考になったことと思う。受講者からのアンケートも参考にし、さらに本セミナーを充実させるよう関係者一同努力する所存である。第3回本セミナーの開催が、本誌の「おしらせ」

欄並びに日本分析化学会のホームページに掲載された際には、ぜひ奮って参加していただきたい。

最後に、会場その他お世話をいただいた（株）パーキンエルマー・ジャパンのスタッフに、この場をお借りして御礼申し上げます。

〔実行委員・千葉大学分析センター 関 宏子〕



理事会だより

2005年度第5回理事会が12月22日13時30分から18時まで本会会議室で行われた。前回事務録の確認の後、報告事項（各種委員会の活動状況等）23件、承認事項（本会定款により理事会の承認を必要とする案件）28件、審議事項（人事と、総会に係る重要案件である事業計画・収支予算と事業報告・収支決算等にかかわる案件）8件を処理するのであるから、少しでも立ち入った議論をしようとする、会議時間は4時間半でも充分とは言えない（予定は3時間半）。

会議の当日に48ページにわたる資料が配布されているので、会議の詳細については各支部選出の理事にお尋ねいただくとして、まず第5回理事会に出席しての個人的感想を述べさせていただきますことにする。

審議事項のうち、2006年度役員候補者について審議する中で、役員選出方法について一つの課題があらわれた。理事会では上記のように多数の案件を取り扱うのであるから、年6回以上開催するよう定款に定められている理事会の前に、さまざまな案件を整理し議題を準備する組織は必須である。また、多くの案件についてはあらかじめ取り扱うの原案を用意しておく必要がある。本会ではこの役割を副会長2名と理事6名からなる「常務委員会」が果たしており、関東地区から選出される2人の副会長のうち、2年任期で任期2年目の副会長が常務委員長となる。しかし、本会の「細則」第15条、副会長候補者選出の項には、2年任期の副会長を選出する方法が明記されていない。常識的には選考委員会での得票数の多い方にお願いするのも知れないが、会長と密に連絡を取る必要から考えれば、2人の内から現会長あるいは次期会長が推薦する方法もありうる。本会の運営にとって実質的に極めて重要な職務であるので、さまざまな議論が交わされたが、2007年度の常務委員長となる副会長については会長が推薦し、今後については常務委員会等で方策を議論することになった。

続いて、4月以降5回の理事会に出席しての感想を述べたい。定款によれば、理事会は日本分析化学会のすべての重要事項（事業計画・収支予算と事業報告・収支決算、財産目録等は総会で承認される）の議決と執行にあたる機関である。しかし、最初に記したように多数の案件を同時に扱っていると、理事会の重要な任務が何であるかがわからなくなってくる。

定款によれば、本会にとっての重要事項とは、「分析化学に関する学理技術の進歩を図るとともに、会員相互の連絡研修を行い、もって学術、文化の発展に寄与すること」であるから、① ぶんせき誌や論文誌を充実させること、② 年会や討論会などの学術集会を実りあるものにすること、がまず挙げられる。

①は会員の投稿とそれぞれの編集委員会委員や査読者の努力で維持されており、②も各支部と支部会員の努力で毎年盛会である。また、役員人事の手続き等は日本分析化学会細則で詳細に規定されている。従って、理事会で審議すべき最も重要な課題とは、本会の事業計画と収支予算案の作成とその適正な実行ということになる。数年前に本会が深刻な財政危機に陥ったことは記憶に新しい。1998年度には4,200万円もの支出超過となったが、小野前事務局長を中心とした本部事業の拡大活動により、2000年度以降2004年度まで正味財産増加額が2,000万円以上となり、健全財政が構築されている。2004年度実績によれば、本部事業としての①講習会収益、②標準物質頒布収益、③技能試験収益、④受託事業収益の拡大が財政健全化に貢献している。しかし、これらの本部事業は前事務局長個人の努力とその人脈や経験によって拡大してきた面が強く、本会としてこれらの事業を継続的に発展させてゆく体制はまだできていないと感じられる。本会の主要な事業である会誌発行を、会員の会費収入と広告収入とだけで維持することが極めて困難な状況にあることはすでに経験済みであり、上記の4事業はぜひ継続して発展させる必要があると感じている。定款にある本会の目的にも合致する、これら4事業の発展を支える組織体制作りが、今後の理事会で審議されるべき最も重要な課題ではないかと考えている。

〔庶務理事 真鍋 敬〕

◆ 会員拡充コーナー

現在日本化学会をはじめ多くの学協会で会員の減少傾向が続いています。日本分析化学会でも他の学協会よりその減少率は小さいものの同様の傾向を示しています。基本的な学会活動である論文誌及び機関誌の発行、学会の開催、会員の表彰などをはじめとする活動以外にも、種々の窓口を通じて社会貢献活動や会員サービスのための事業を行っています。そのような学会活動の基礎となるのは会員数の大きさとその会費収入であります。会員拡充委員会ではこれまで同様、会員拡充運動を展開しています。新入会員には入会金無料に加え、周期律表の入ったクリアフォルダーの贈呈を、多くの会員の紹介者の方には種々の特典を用意しています。また、各支部からも積極的に会員を推薦していただくため、新入会員の支部ごとの入会数に応じて支部への還元をはかることなども実現しつつあります。また、除名者の内容を見ると多くは年会や討論会で講演することを目的に入会し、その数年の内に除名対象となっている学生会員であることがわかりました。そこで学生の卒業の際に担当の教官に継続を勧めていただくなどの働きかけをぜひお願いいたします。また、もしも継続を希望しない場合は大変不名誉な除名処分とならないように退会手続きをしていただくようご指導をお

願い致します。会員にかかわるこれらの活動は、日本分析化学会を構成する会員の方々のご理解とご協力によって成り立ちますので、ぜひともよろしくお願い致します。

このような会員拡充活動や退会する会員の引き止め活動を行っています。これまで対象としてきた分析化学関係者の中だけで行っていたのでは限りがあり、容易に飽和してしまうことになります。幸いなことに、分析化学は大学の分析化学担当者や分析機器関連企業の従事者、分析関連の技術者だけに限ったものではありません。近年では、BSEや遺伝子組み換え食品、残留農薬やその表示などの食の安全性が叫ばれ、これらの問題の正確な分析が必要となっています。また、半導体製造にかかわる電子機器メーカーでも μ -TASをはじめとする微細加工技術とそれを応用した機器開発を単独・あるいは種々の化学関連分野と共同で行っています。生命化学の分野でも、その評価には分析化学の手法が欠かせません。このように、分析化学の登場する場面はますます増加することが予想され、会員拡充委員会ばかりでなく、日本分析化学会としてもその守備範囲を拡大する必要があります。

このような状況を鑑み、これまで我々が対象としてこなかった分野との交流及び理解のため、中村 洋委員長が発案で異分野交流プロジェクトを立ち上げました。まず、食品関連分野の研究者との交流会を企画しました。2006年2月10日（金）9時30分～19時まで、こまばエミナースで開催されました。

1. 食品分析の国際標準化（食品総合研究所）安井明美
2. 食品苦情と試験検査（東京都健康安全研究センター）中里光男
3. 食品衛生とポジティブリスト制（国立医薬品食品衛生研究所）佐々木久美子
4. 動物用医薬品規制の動向と残留分析法（埼玉県衛生研究所）堀江正一
5. HACCPを支える食品分析（日本食品分析センター）荒木恵美子
6. 食の安全と分析化学（食品薬品安全センター）渡辺卓穂
7. 食品中の残留農薬検査（日本生協連）内堀伸健
8. マイコトキシンの分析（アサヒビール）望月直樹
9. ドットプロット-蛍光法によるアミノ酸・核酸中の残存タンパク質分析（味の素）山田尚之

最後に「食の安全と日本分析化学会への期待」と題して中村実行委員長と上記演者の方々とのパネルディスカッションが行われ、食品分析に携わる研究者の方が日本分析化学会へどのようなことを期待するかという点について意見交換が行われました。今後このような異分野との交流や理解により、ますます複雑化する科学における本会の役割や重要性を認識する場を提供できるものと思われます。今後とも同様の活動を続けていく予定です。ご協力とご理解をお願い致します。

〔会員拡充委員会委員、首都大学東京 内山一美〕